

2 兆候

病気だと判断すべき兆候はいくらでもあった

病気には必ず兆候がある。多くの人は自分の健康に自信があつて、「風邪だろう。」とか、「背中が凝っているだけだ。」などと兆候を無視する傾向にある。ただ、ちょっとでも具合が悪いとすぐ医者に行く type の人でも、通っている医者が慣れっこになっていると、重大な兆候を見逃すことがある。

今にして思えば、妻の場合はいくつかの兆候があつた。

- (1) 病気が発見される一年ほど前に、突然の発熱と嘔吐・下痢があつた。2月だったので、当時はやっていた流感だと思ってその対処をし、4、5日寝ているうちに直ってしまった。ただ、いままでの流感にしてはかなり症状が重かったが、下の子が大学受験だったことと、私があるとある大きな資格を取得する寸前だったので、精密検査に行くように勧めたり、付き添って病院へ行くという発想が出なかった。
- (2) その年の5月に妻が脚立の一段めから滑り落ちて腕の尺骨を骨折した。これは、近所の知り合いで腕が良い接骨院へ行って骨を継いでもらった。発病してから、その接骨院の院長が後から言うには、「このくらいの年で思わぬけがをする人は、内臓が悪いことが多い。」とのことだった。「そのとき、雑談でもその話をしてくれていたら。」と言つたが、「いつも忙しそうだったので、精密検査を勧めなかった。」と言われてしまった。
- (3) 腕の骨折が直つてすぐの夏に二人で海外旅行した際に、寝台列車で目的地に着いた朝から一日中観光した後、夕食に脂っこい食事を摂った。夜中の11時ごろ2月と同じ現象が起こつた。このときも「風邪気味のところへ、疲れた上に脂あたりをしたのだろう。」と勝手に判断して、売薬と翌日の観光を一日 cancel することで何となく直ってしまった。旅先であつたこともあつて、食べ物と疲れに用心しながら無事帰国した。
- (4) 帰国後2週間めに私の母親へのごますりのために、温泉旅行が予約してあつた。その前にまたまた2月と同じ現象が出た。さすがに今度は病院へ行くことを考えたが、体調がすぐに直つたことと、旅の予約が迫つていたので、やはり精密検査に行くことができなかった。温泉で疲れを取つた後、体調はすこぶるよかつたので、11月にある自治体の節目健康診断の結果を見てから病院へ行こうと決めてしまった。

「私はだいじょうぶ。」という根なき自信が大敵

なかなか病院へ行かなかつた理由には、浪人してしまつた子供の件や何かと忙しかつたこともある。ただ、あまり急がなかつたもう一つの理由は、ちょうど2年前にある大学の附属病院で、その知り合いの講師の先生が妻のことを心配して、全身の検査をしてくれていたからである。血液検査やX線、体部のCTなどを撮ってもらつて、「肥満気味以外には問題が見つからない。」という診断をいただいていた。

このことと、過去の妻自身の健康状態から、大きな兆候をすべて見逃してしまつていた。「健康は金で買うことも可能だが、命は金では買えない。」という言葉の意味は、今にして思えばよく理解できる。やはり「病院へ行って検査する時間と費用がもつたない。」という気持ちが私や妻の心の中にあつたと思われる。

検査は繰り返して念を入れよ

兆候があつたら、どのようなことでも徹底的に検査して、どこかの病院で問題ないと言われても、念のため別の病院へかかってみることである。CTで調べてくれた大学病院でも、その

ときの画像にはたまたま写らなかつただけだったのだ。あとで知ったが「X線 CT scan は通常 10mm pitch で herical に体を切っていくので、運が悪いと 10mm 以下の変異は見つけることができない。」ということだ。

Herical scan の pitch を細くして、software 加工して立体画像を描かせると、細かい変異でも見つけることができるが、患部の見当が付いていなければそのようなことをすることは難しいし、保険適用とはならない。通常の一部の全身画像では、小さな病巣を見逃すのは仕方がないことである。

体の異常を感じたとき、病院へ行って検査を受けた結果、何もないと言われても、別の方法による検査を受けるか、2度同じ検査を受けるのが、よい戦略であろう。

この項終了
©2003 Dr.YIKAI